

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：33932

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04650

研究課題名(和文) 保育者のキャリア発達に応じた子どもとの関係構築プロセスに関する研究

研究課題名(英文) Research on the process of relationship-building with children according to childcare teachers' career development

研究代表者

上村 晶 (UEMURA, Aki)

桜花学園大学・保育学部・教授

研究者番号：60552594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保育者の子ども理解を関係性の視座から問い直した上で、保育者が子どもとわかり合おうとする関係構築プロセスと背景要因を質的に明らかにすることを目的とした。保育者(N=10, 保育経験年数1-16年目)に2歳児との1年間の関わり合いにおける関係性の変容について、月1回の頻度でインタビューを行った。その結果、保育者のキャリア発達に応じて、子どもとの“わかり合い”を捉える視座が変化していたことが見出された。よって、保育者のキャリア発達に伴う子ども理解の深化とは、“わかり合い”を捉える多様な視座の転換・獲得を通じた関係性の変容であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義としては、保育者の子ども理解を“子どもとわかり合おうとする関係構築プロセス”という視座から捉え直した結果、保育者が子どもと協働的に“わかり合い”を紡ぎ出す能動性を有した絶え間ないプロセスであること、二者間のみに関じられた理解ではなく、多様な文脈との往還を踏まえて生成・変容していく開かれた理解であることが示唆された。特に、保育者のキャリア発達に伴い“わかり合い”を捉える視座の転換・獲得が見出されたことから、子どもを“わかる”から“子どもとわかり合おうとする”という思考転換に基づき「わかり合おうとする志向性」の涵養を図ることは、保育者の力量形成に資すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to qualitatively clarify the relationship-building process and background factors wherein childcare teachers try to understand children by reexamining their understanding of children from the relationship perspective. Childcare teachers (N=10, 1-16 years of childcare experience) were interviewed at a monthly frequency about changes in their relationships through a series of one-year interactions with a 2-year-old child. As a result, it was found that the perspective of “mutual understanding” with the child changed according to the childcare teachers' career development. Therefore, it was suggested that the deepening of understanding of children with career development is related to the transformation of relationships through the transition and acquisition of various perspectives on “mutual understanding.”

研究分野：幼児教育学・保育学

キーワード：関係構築プロセス 子ども理解 保育者

1. 研究開始当初の背景

国内の幼児教育・保育において、子ども理解に根差した情動的な関わりができる保育者の育成が求められている。保育の質の向上を試みる上で、保育者の子ども理解は保育実践を担う重要な概念であり、丁寧な子ども理解を基盤に一人一人の子どもと関係を構築していくことが、保育の専門家として重要であると言える。

従来の子ども理解研究(上野, 1993、岡田, 2005、田代, 2015、鯨岡, 2011、室田, 2016、Ready, 2014 など)の知見を踏まえると、保育現場で求められる子ども理解とは、「保育者が子どもをわかろうとする」という子どもを客体化した一方向的な客観的理解に留まらず、「保育者が子どもと互いにわかり合おうとする関係を構築しようとする」という保育者と子どもの関係性の視座から問い直すことが重要であると考えられる。その上で、以下2点の課題が挙げられる。

(1) キャリア発達に応じた子ども理解に関する困り感の内実と克服方法を解明する必要性

特に初任若手期の保育者は、多様な子どもを理解する難しさに困り感を抱きやすいこと(加藤ら, 2013) また、保育者のキャリア発達に応じて保育者アイデンティティにおける揺らぎが変容すること(足立ら, 2010)などを踏まえると、初任若手期だけに留まらず、中堅期以降の保育者も、多様な困り感を抱きつつ子どもとの関係を構築していることが推測される。

(2) 3歳未満児を対象とする子ども理解研究の乏しさ

従来の子ども理解研究では、3歳以上の幼児を対象とした研究知見(岡田, 2005/2008、吉村ら, 2003、志賀, 2001)は多岐に渡っているものの、3歳未満児を対象とした研究はあまり存在していない現状があったが、乳児でも大人の意思をわかろうとすることができるという近年の知見(Ready, 2014、佐伯, 2013)や、平成29年の保育所保育指針(2017)改定で3歳未満児における保育の専門性は提言されたことを踏まえると、3歳未満の子どもを対象とした関係構築の在り様を明らかにすることは、今後の保育実践において大きな意義があると考えられる。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では相互主体的関係に着目した鯨岡(2011)の関係発達論に依拠し、保育者の子ども理解を関係性の視座から問い直すことを通して、「保育者が子どもとわかり合おうとする関係構築プロセスと背景要因」を質的に解明することを目的とする。具体的には、日々の保育実践の中で子どもと対峙している初任期から中堅後期の保育者を対象に、2歳児との1年間を通じたかかわり合いにおけるエピソードと語りから、複線径路・等至性モデルを援用したParallel-TEMで関係構築プロセスを可視化し、保育者のキャリア発達に応じた子どもとわかり合おうとする関係構築プロセスと転機となる背景要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 調査協力者

2歳児の保育を担当した保育者計10名(1-16年目)とその視点児(2歳児)を対象とした。なお、保育者のキャリア区分については、Vander(1988)の保育者の発達段階モデルや足立ら(2010)の保育者アイデンティティの形成段階に依拠しつつ、保育経験5年を節目に子ども理解の視点が変化すること(高濱, 2001、志賀, 2001)や、初任期は仮想と現実の差異に戸惑いリアリティ・ショックを受けやすいなど特質的な傾向が見られること(谷川, 2013)を踏まえ、初任期(1年目)、若手期(2-5年目)、中堅前期(6-10年目)、中堅後期(11年目以降)に分類した(表1)。

表1: 調査協力者の属性

調査年度	保育者	実経験年数	区分	視点児	属性	Interview 時間
2017年度	A 保育者(女性)	1年目	初任期	2歳男児	Y1 幼保連携型認定こども園(私立)	264分
2017年度	B 保育者(女性)	2年目	若手期	2歳女児	Y1 幼保連携型認定こども園(私立)	302分
2017年度	C 保育者(女性)	4年目	若手期	2歳女児	Y1 幼保連携型認定こども園(私立)	266分
2017年度	D 保育者(女性)	6年目	中堅前期	2歳男児	Y2 幼保連携型認定こども園(私立)	305分
2017年度	E 保育者(女性)	7年目	中堅前期	2歳女児	Y1 幼保連携型認定こども園(私立)	410分
2017年度	F 保育者(女性)	14年目	中堅後期	2歳男児	Y2 幼保連携型認定こども園(私立)	239分
2018年度	G 保育者(女性)	11年目	中堅後期	2歳女児	Y1 幼保連携型認定こども園(私立)	495分
2018年度	H 保育者(女性)	12年目	中堅後期	2歳男児	Y2 幼保連携型認定こども園(私立)	281分
2018年度	I 保育者(女性)	12年目	中堅後期	2歳女児	Z2 保育園(公立)	342分
2018年度	J 保育者(女性)	16年目	中堅後期	2歳女児	Z1 保育園(公立)	441分

(2) 調査期間

2017年4月～2019年3月(2019年4月以降にフォローアップインタビューを実施)

(3) 調査方法

調査協力者に1人の視point児(以下、本児)を選定してもらい、1年を通じて、月1回の頻度で半構造化インタビューを実施した。主に、先月の本児の大きな変化、保育者と本児の関係を特徴づける事例、省察、次なる手立て、を尋ねると同時に、その時点における保育者と子どもの二者関係性(関係性)の可視化を依頼した。また、年度終了後に、1年に及ぶ保育者と本児の関係性における大きな転機と期の大別を尋ねると共に、1年を通じた関係性の可視化を依頼した。

(4) 分析方法

分析には、テーマ分析(伊賀,2009)と、複線径路・等至性アプローチ(TEA:サトウ,2015)から発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis: TLMG)と複線径路・等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)を採用した。本研究では保育者と子どもをそれぞれ独立して捉えず、保育者と子どもが紡ぎ出す関係性そのものを1つの総体として捉えていく視座に立ち、時間軸に沿って両者の関係性の変容を同時並行的に描くParallel-TEM(上村,2018)による分析を行った。Y軸に非可逆的時間を、X軸に保育者と子どもを同時並行的に位置付け、二者関係性の様相を左右の振り幅で表すと同時に、互いにわかり合えた実感の推移を時間軸に沿って曲線で示し、両者の間を織り成す面積を“互いにわかり合おうとする関係の広がり”として二者関係性をモデル化した(図1参照)。なお、本研究全体を通じて信頼性・妥当性を担保するために、調査協力者と協働的にTEM図を作成・修正するよう留意した。

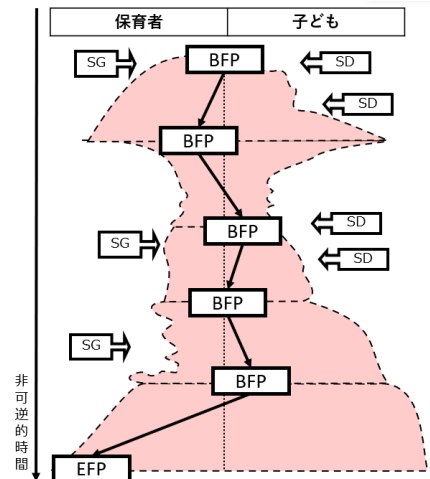


図1 Parallel-TEM図

(5) 倫理的配慮

日本学術振興会のガイドライン(2015)や日本保育学会倫理綱領(2010)に則り、調査協力園の園長・保育者・視point児の保護者へ口頭と文書で調査趣旨を説明し、個人情報保護を遵守して実施することを伝えた上で、研究協力の承諾を得た。また、本研究における調査協力者及び園名は全て仮名で取扱い、人権に配慮した。なお、所属大学の研究倫理審査を受審し、実施許可を得た。

4. 研究成果

(1) 保育者のキャリア発達に応じた関係構築プロセスの特徴

各期の保育者において、揺らぎの内実や具体的な内容は個人的な差異が生じるものの、概ねの関係構築プロセスは、関係を構築しようと模索する手探り期を起点に、五里霧中感を抱き困惑する時期、親和的関係の再萌芽を実感する時期、関係促進の手応え感やわかり合えてきた実感をもつ時期などの段階を経て、関係を構築していたことが見出された。保育者キャリア発達に応じた見出された特徴は、以下の通りである。

初任保育者(1年目)の関係構築プロセスの特徴

まず、初任期の保育者においては、①子どもの姿に対する保育者の受け止め方の差異が関係構築へ影響を及ぼすこと、②初任期の自信のなさには「初任期特有の専門職としての自信のなさ」と「一個人としての自信のなさ」が潜在している可能性があること、③初任保育者を取り巻く人的環境の変化も関係構築の外的要因として影響する可能性があること、などの特徴が見出された。初任期の保育者は、実践経験が乏しさから自信が持てない、多様な事象に即時対応できないなどが定説化されている一方で、初任保育者なりに奮起しながら多様な混乱や葛藤を乗り越え、子どもとわかり合おうとする関係を構築しようと試みていたことが示唆された。

若手保育者(2-5年目)の関係構築プロセスの特徴

次に、若手期の保育者においては、①クラス環境変化に伴う“集団の中で個別具体的な関係を構築する難しさ”が葛藤を引き起こしていたこと、②関係疎遠・困惑状態における丁寧な省察が新たな関係構築の再起点となること、③子どもへのわからなさに由来する尊重志向性が関係構築を促進させること、④可視的状況と非可視的状況を包括的に捉えて判断する傾向があること、などの特徴が見出された。若手期は、キャリア発達の途上段階であるため、多様な外的環境の影響を受けながら揺らぎが生じやすいが、わからないからこそわかり合いたいと真摯に向き合う保育者の志向性が、その後の関係構築のプロセスを左右することが示唆された。

中堅前期保育者（6-10年目）の関係構築プロセスの特徴

加えて、中堅前期の保育者においては、④多様な環境移行や保育者の職位移動など園内の環境変化に伴い、子どもとの狭間に生じた物理的距離が心理的距離に影響を及ぼすと同時に、葛藤の共鳴が生じること、⑤職務多忙感・転職や育児復帰後の余裕のなさ・過去体験の自戒や再現恐怖感などによって関係構築が抑制され、新たな関係構築を模索したとしてもすぐに価値変容に至ることが難しいこと、⑥言語を媒介としたコミュニケーションによって、意思疎通が明確になり、感情共有を誘発することで関係構築が促進されること、⑦見守る・待つなどの保育行為が子どもの主体性を引き出し、関係構築の促進を助勢したこと、などの特徴が見出された。中堅前期は、着実に実践経験を積み重ねると同時に、転職や育児休業を経験したり、リーダー・主任職など職責のある職務に就いたりするなど、保育者自身のライフステージに様々な転機が訪れることも多いが、このような自身の多忙感や転機を乗り越えつつ、子どもへの主体性を十分に尊重することでわかり合おうとする関係を構築していくことが示唆された。

中堅後期保育者（11年目以降）の関係構築プロセスの特徴

最後に、中堅後期の保育者においては、⑧クラス内の人的環境の変化に伴う本児集団双方対応困難感や、集団的一斉保育環境に伴う公平対応困難感、前園保育観の呪縛などから関係構築が抑制されること、⑨保育者個人の時間的・精神的ゆとり、即時介入抑止意識転換、関係構築速度緩和、自己選択尊重志向、保育者心情率直表現などが関係構築を助勢していたこと、⑩関係構築の速度や距離感などを俯瞰的に捉える視点を持ち合わせながらペーシングを図ることが可能になること、⑪園内外情報共有、職員間方向性共有、園内協働的サポート、子ども主体性尊重園風土など、関係構築を下支えする実践コミュニティ要因によって関係構築が助勢されていたこと、などの特徴が見出された。中堅後期の保育者は、保育者自身の過去の保育経験や実践的文脈に応じた固定観念などが影響しやすい一方で、比較的早期の段階で子どもとの関係構築に至ることが多く、子どもとの関係性を俯瞰的に捉えながら多様な関わりを実践することでわかり合おうとされていたことが示唆された。

（2）保育者のキャリア発達に応じた“わかり合い”を捉える視座の転換

全調査協力者の関係構築プロセスから、わかり合おうとする関係構築プロセスの途上において、わかり合えた予感を抱き始めた「関係促進場面」と、わかり合えた確かな手応えや確信を感じた「確信生起場面」の2つが存在していることが明らかになった。したがって、上記2場面に着目し、発生の三層モデル（TLMG）を踏まえたTEMで分析した結果、保育者のキャリア発達に応じた“わかり合い”の差異が明らかになった。

保育者のキャリア発達に応じた“わかり合い”を捉える視座の差異

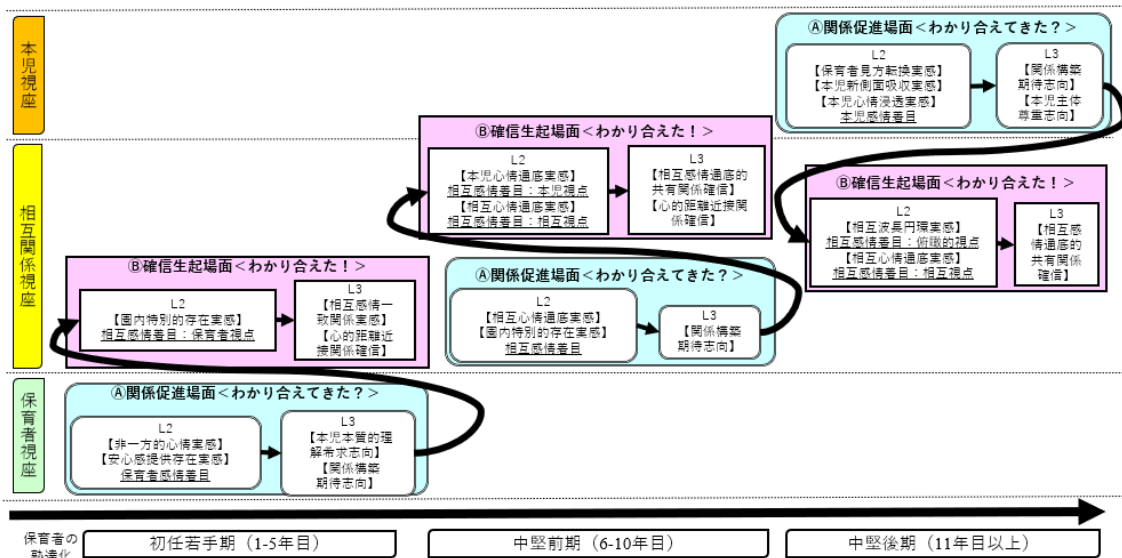


図2 保育者の熟達化に応じた“わかり合い”を捉える視座の差異

まず、保育者のキャリア発達に応じて、“わかり合い”を捉える視座に差異が見られた。具体的には、①初任若手期（1-5年目）は、保育者と子どもの主客構造に基づく『保育者視座』から“わかり合いの予感”を抱く一方、この予感が確信に変わる際には、『保育者視座から相互関係視座への転換』が徐々に図られていたこと、②中堅前期（6-10年目）は、関係促進場面・確信生

起場面の双方とも、主に『相互関係視座』から捉えていたと同時に、徐々に『本児視座』を往来しながらわかり合えた実感を有しており、主客構造から少しずつ脱却しながら、『相互関係視座と本児視座を往来』することを通して、相互主体的関係の中で捉える視座を獲得しつつあること、◎中堅後期(11年目以上)は、関係促進場面では『本児視座』から相互主体的関係の中でわかり合えてきた予感を抱いた上で、『相互関係視座』に立ち戻って本児視点・俯瞰的視点からわかり合えた実感を抱いており、『本児視座』を一度経由してから『相互関係視座』に改めて立ち返って“わかり合い”を捉えていたこと、が見出された(図2参照)。

他者比較から相互共有的視点・本児視点へ焦点移行する判断根拠の変化

また、“わかり合い”を捉える判断根拠も、保育者のキャリア発達に伴う差異が生じていた。具体的には、④初任若手期は、他保育者比較・家庭比較など「他者と本児の関係性」と「私と本児の関係性」を客観的に比較して優位性や同一性を見極めながら判断していたこと、⑤中堅前期は、徐々に外部他者との比較ではなく、自身と本児の関係性に焦点化しつつ互いの感情を共有するなど、非可視的情報も手掛かりとしながら判断していたこと、◎中堅後期は、相互共有的根拠や本児視点的根拠が多く顕在化していたことなどから、保育者のキャリア発達に伴い、徐々に外部状況との比較から、保育者自身と本児の関係性自体に焦点化しながら“わかり合い”を判断していたことが見出された。経験の乏しい初任若手期は、他保育者や家庭など何らかの外部根拠に無自覚的にアクセスしながら比較する特徴があると同時に、外部根拠によって信憑性や妥当性を見出しながら、“わかり合い”の実感の確かさを追求・補強していることが示唆された。

“わかり合い”に影響を及ぼす背景要因

最後に、“わかり合い”に影響を及ぼす背景要因として、④実践コミュニティ要因(クラス環境変化・園風土)、⑤保育者特性自覚化(保育者自身の個人的特性の自覚化)、◎保育者の志向性(本児主体性尊重・本児の本質への信頼)、が見出された。子ども主体の園風土などの『実践コミュニティ』が基盤としてまず存在することで、保育者個々人がそのような園風土の中で実践を積み重ねることが可能となり、その継続的蓄積の中で、子どもを尊重し信頼する志向性を有していくこと、また、これらの志向性は子どもとわかり合おうとする際にも発揮され、関係構築を促進したりわかり合えた確信を抱いたりすることにつながることを示唆された。

3) 総括と本研究の意義

以上の結果を踏まえ、保育者の子ども理解を「保育者が子どもとわかり合おうとする関係構築プロセス」という視座から捉え直した際、以下の意義が見出された。

まず、保育者のキャリア発達に伴う子ども理解の深化とは、“わかり合い”を捉える多様な視座の転換・獲得を通じた『保育者と子どもがわかり合おうとする関係性の変容』であることが示唆された。従来の先行研究では、子どもとの関わり合いにおける相互理解の重要性は定説化されている一方で、キャリア発達に基づいた相互理解の変容過程までは言及されていなかったが、本研究のように“子どもをわかる”から“子どもとわかり合おうとする”という思考転換に基づき、常にわかり合おうとする志向性を持ち合わせていくことは、保育者の子ども理解の更なる深化に資すると考えられる。

また、保育者の子ども理解とは、保育者側からの瞬時的かつ一方向的な理解ではなく『保育者が子どもと協働的に“わかり合い”を紡ぎ出す能動性を有した絶え間ないプロセス』であると同時に、二者間のみ閉じられた理解ではなく多様な文脈との往還を踏まえながら常に生成・変容していくような『保育者と子どもを取り巻く多様な文脈に開かれた理解』であることが見出された。関係構築の視座から捉え直すことで、子ども理解の新たな一側面が見出されたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 上村晶	4. 巻 20
2. 論文標題 保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因（1） 初任期の保育者に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上村晶	4. 巻 57（3）
2. 論文標題 「年度途中のクラス担当者変更」は保育者と子どもの関係構築プロセスにどのような影響をもたらすのか ：保育者の葛藤の諸相に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 32-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20617/reccej.57.3_32	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上村晶	4. 巻 21
2. 論文標題 保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因（2） 若手期の保育者に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上村晶	4. 巻 17
2. 論文標題 保育者と子どもの関係構築プロセスを可視化する試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 上村晶
2. 発表標題 支援を必要とする子どもとわかり合おうとする関係構築プロセス - 関係構築に影響を及ぼす背景要因に着目して -
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上村晶
2. 発表標題 保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因（3）
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上村晶
2. 発表標題 保育者と子どもの関係構築プロセスの変容と要因（2）
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aki UEMURA
2. 発表標題 How does a young teacher in Japan build relationships with a young child through mutual understanding?
3. 学会等名 EECERA 29th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Aki UEMURA
2. 発表標題 How does the novice teacher build relationships with a young child through mutual understanding in Japan?
3. 学会等名 EECERA 28th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村晶
2. 発表標題 補佐的立場の保育者は どのように子どもとの関係を構築しようとしているのか
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上村晶
2. 発表標題 環境変化に伴う子どもと保育者の関係性の変容 - 園内における保育者の役割変化に着目した関係構築プロセス -
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村晶
2. 発表標題 保育者と子どもとの関係構築プロセスの変容と要因(1)
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----